

第44回展 「松村謙三特別賞」 米田和恵

審査員の得票数及び審議で決定される、昭和会展の各賞。しかし、その限りでない賞も存在する。

好評を得ながらもギリギリで得票数が足りなかった、そんな作家の中でも「それで賞を逃すのはあまりに惜しい！」と思わせる才能を顕彰するための、「松村謙三特別賞」がそれ。

過去、2009年に二度だけ設定された（※）同賞を受賞した米田和恵さんが今回のゲスト。

日動画廊社長の長谷川徳七氏はじめ、多くの人々に成長を囁望される、メルヘンチックでありながらシュールな雰囲気だだう独特の世界。その魅力の源は？

今月は新人作家特集号ということで次代の巨匠候補をとりあげる本連載もパワーアップ、増ページにてお届けします！

※2013年開催の第48回展でも、4年ぶりに同賞が授与されました

【ホスト】

松村謙三（プリヴェ企業再生グループ代表取締役社長・大阪大学 知的財産センター 招聘教授）

南畠 宏（美術評論家・女子美術大学教授）

長谷川徳七（日動画廊代表・昭和会事務局長）

長谷川 暁子（日動画廊専務取締役）



前列右から、プリヴェ企業再生グループ社長・松村謙三、作家の米田和恵、日動画廊社長・長谷川徳七、後列右から日動画廊取締役・長谷川暁子、美術評論家・南畠宏の各氏



《旅立ち》 2009年 50号
第44回昭和会展松村謙三特別賞受賞作品
「これからの自分の人生に何か変化をもたらしてくれたらと思い、新しい出発の気持ちをこめて『旅立ち』とタイトルをつけました」

一票差で受賞を逃すのは惜しすぎる！
審査会場での雰囲気に応えた特別賞

——2009年に松村謙三特別賞を受賞されて、その記念展として開催された初めての本格的な個展（2011年9月23日～10月2日／福岡日動画廊）はたいへん盛況だったとうかがっています。米田 出身地でやらせていただけて、すごく勉強になりました。

枚数を考えながらたくさん描くということも、お客さんに見てもらって感想を頂く、という機会もそれまではなかったですし、「画家をめざしながらアルバイトだなんて大丈夫なの？」と心配していた家族や親族からも「よかったね！」と言われて。課題もいろいろ見つかりました。本当に受賞のおかげでいろいろと……あれから4年経ったんですね。あつという間でした。

長谷川徳七（以下徳七） 松村謙三特別賞の受賞から約2年、個展の準備期間は1年弱ぐらいあったかな。個展を開いてから、ぐっと絵がしつかりしてきたね。

松村（過去作品のポートフォリオを見ながら） だんだん作品がよくなってきたね。格段に構図がよくなった。きみ、やっぱり才能があるね！

昭和会展の審査では初めから長谷川（徳七）社長が彼女の絵をイチ押しでした。「いい絵だなあ」とは思ったけど、長谷川社長は特にあなたの才能を見抜いて、審査員の皆さんの前でも「これはいい！」としきりに言っていましたからね。

審査ではけっこう票が割れて接戦だったんです

【右】《story》2001年 20号
「高校2年の時の絵画の授業で描いた作品。本の上に広がる世界をイメージし、大好きなピサの斜塔を描いた。雲とカモメを飛ばすことで、画面の静かな中に動きや流れを入れたかった」



【左】《奇跡を起こす手掛かりⅢ》
2009年 SM
「辛い時に本を読んで、書かれていた言葉に助けられたり、ヒントをもらったので、それをタイトルに込めて描きました。動物が読んでいたら可愛い、と思いがら」



観る方それぞれの物語が 生まれるよう意識しています ——米田和恵



よねだ・かづえ

1984年福岡県生まれ。2001年第1回高校生絵のまち尾道四季展尾道賞受賞。同賞の副賞で翌年フランスへ研修旅行、04年インドへ語学留学、05年アメリカ・ロサンゼルスへ語学留学、07年イギリス、フランス、イタリア旅行など。09年第44回昭和会展松村謙三特別賞受賞。10年第12回雪梁舎フィレンツェ賞展優秀賞受賞。2011年第44回昭和会展受賞記念・米田和恵展開催（福岡日動画廊）作家HP：<http://www.kazueyoneda.com/>

よ。結局たった一票の差で賞を逃したんだね。審査員から「残念だな」という声もあり、「松村謙三特別賞を出しましょう」ということになったんです。（米田さんに向けて）おかげで月刊美術にデビューだね、カラーでバーンと。（笑）
米田 ありがとうございます……緊張します。昭和会展は、賞を獲ったら個展をやってくださるということを知って、本当に「3度目くらいの出品で選考に通つたらいいなあ」というくらいの気持ちで応募したんです。受賞の知らせが来たときはもうとにかくビククリして、母にすぐ電話で知らせて……それからまず考えたことは「明日の授賞式、何を着ていこう？」でした。（笑）ぽっと出なんです、お恥ずかしい。
長谷川暁子（以下暁子） 海外の方がまとめて購入されたりして、個展では20点以上に赤丸がつかましたね。若い作家は、画廊側が展覧会をやったり、いろんなチャンスを作ったり、とプロモートしていかないと知らず知らずのうちに忘れられてしまうことも多いんですけど、次の目標があると一所

懸命に自分を磨くようになる。それによって絵がもうひとつ、よくなりますね。また応援してください。
松村 そんなに人気だったんですか……いや、でも売れますよ。この絵はアジアで売れると思うな！ やっぱ20代の早い段階で賞を獲つたというの、すごいいいでしょう。その後の1年が全然違うよね。
徳七 初出品での受賞んだけど、彼女の面白いところは、美大を経ずに独学で通したという点。よくひとりどこまでできるようになったな、という感じですよ。
今までたくさん見てきた若手作家の中には「非常に熟練しているけれど、面白くない作家」というタイプもいるけれど、米田さんの場合、誤解を恐れずに言うなら「素人みたいなよさ」がある。画商にとっては、そういう作家を見つけて育てていく、というのがひとつの面白みですね。だから非常に楽しみなんだ。今後、作品のメルヘンチックな雰囲気、また違う方向でうまく醸しだしていけたら、もっと面白い作品になっていくと思います。
南 「素人みたいなよさ」というのは、ものすごく筆遣いが新鮮だからなんです。穢れがない、とても言いたくなるような、ある種の清らかさを持っているんですね。一定の線を越えないという、止め感がある

堅持されていて、線一本をとっても、一定の純度がある。これは非常に、米田さんの強みだと思います。

全体的に寓意的な感じに仕上がっていますが、特に物語性を意識しているところはあるんですが、何かを暗示しているとか、これから何かが始まる、というような含みだとか。

米田 どんな見方をしていたとしても、観る方が自由に、心の中にそれぞれの物語が生まれるような作品にできたらいいな、とは意識しています。

余計なことは考えずに想像力を膨らませていた子供が、大人になるにつれてあきらめのようなものにつきまるとされる——これは『ちいさなちいさな王様』という本を読んでいて出合ったイメージなんです、自分の絵の中にそういうテーマを織



《遠くの街へ》2010年 100号 雪梁舎美術館蔵

第12回雪梁舎フィレンツェ賞展優秀賞受賞作品

松村謙三特別賞受賞の翌年、たて続けの大きな受賞となった作家にとっても思い入れのある作品。「本のページに描かれた孤島の港町に住む少女が、まだ見ぬ海の向こうの世界に思いをはせて手紙を送る……というストーリーをつけて描きました。先頭のカモメの脚に手紙が巻きつけてあります」

『ちいさなちいさな王様』

アクセル・ハッケ 作、ミハエル・ゾーヴァ 絵
那須田淳／木本栄 共訳、講談社刊
作家にとって、「こういう世界を描きたい、と思うようになったきっかけになった本」だという。

「ある日『僕』のところにあらわれた、人差し指くらいの大きさの王様。彼の世界では生まれた時は体が大きくなるでも知っているのだけど、毎日少しずつ小さくなって知っていたことも忘れていく、そしてその想像して楽しむことができるようになるという……。」



描いた作品のモチーフも「本」です。高校の芸術コースで、シュールレアリスムの概要を学んでから実際に自分でシュールレアリスムの絵を描く、という授業があった、「どうしても、本を描きたい」と本の中の世界をとりこみながら作品にしてみたら、描いていくと楽しくて……その楽しさの記憶がずっと残っていたことも、画家になりたいというモチベーションになりました。
南 シュールレアリスムは奥が深い世界だし、高校のときはたぶん表面的な接触だっただろうから

なんなら私が教えましょうか。（笑）
松村 これ、録音されていますよ！（笑）
米田 教えていただきたいです……（笑）あ、変な意味じゃなくて！

大好きだった「本」の世界と シュールレアリスムとの融合から

——先ほど『ちいさなちいさな王様』の話が出ましたが、創作活動の原点にも「本」の存在があったそうですね。

米田 はい、本全般が好きです。幼い頃から母がよく本を読ませてくれて、児童文学を読んで文字から頭で想像する、というのがすごく好きでした。ポर्टフォリオにも載せているんですが、初めて

もう一度勉強してみるといいと思います。

例えば、詩人で小説家のロートレアモン「マルドロールの歌」の中に「解剖台の上のミシンとコウモリ傘の偶然の出会いが美しい」という一節があるけれど、二者がおりえない状況で出合うという設定は非常にエロティックな世界の喩えなんですよ。そこを入口にしてみると、さっき言った「そこはかといエロティズム」がもうちょっと大人の感覚として出てくる可能性があると思います。

この作品(《Story》)もいいね。作家の初期の作品っていいですね。これももう誰かのコレクションですか？

米田 これは実家にあります。

松村 じゃ、私がいいます。

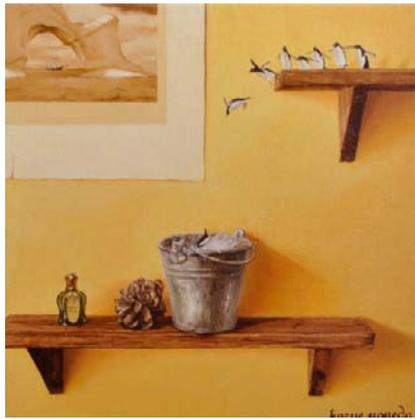
米田 いえいえ、高校生のときの作品ですよ、近くから見たらどうしようもない……じゃあ描き足させてください！

松村 いや、描き足したらダメ。きりがなくなる(笑)。……僕は体系的に作品を集めたいと思っているんです。若い頃からの作品を体系的に集めている美術館はありません。有名な作家の絵はあちこちに散逸してしまっています。

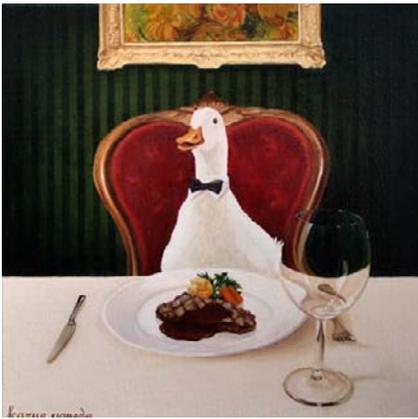
——そういう意味で、初期の作品からコレクションにするのは重要ですね。その作家の天才性才能の片鱗がまずそこに宿っているわけですし。徳七 そうそう、いつも言うんですけどね、プロフェッショナルの画家として必要なのは、まず70パーセントが天才的なもの、あとの20パーセントは時の運、そして最後の10パーセントにやっとな

これから挑戦すべきこと—— 物語性の充実と大作の制作

松村 格段によくなくなってきてるよね！ このフィレンツェのドウオモを描いた作品(《魔女の住む街》)もいい絵じゃないですか。先週行ってきたばかりだからね、思い出します。



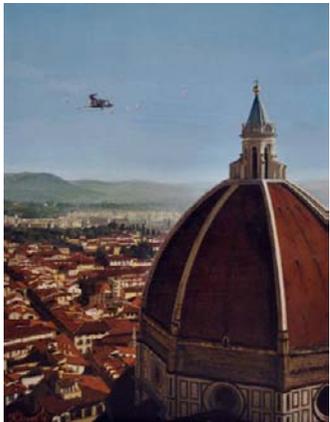
《ジャンプ台》 2011年 6号
「楽しく、明るい絵が描きたいと思っててがけた作品です」



《ステキな気分》 2012年 4号
「食卓動物シリーズです。思い思いに想像していただけたら」



まつむら・けんぞう
ブリヴェ企業再生グループ株式会社
代表取締役社長。他に大阪大学
法科大学院招聘教授、大阪大学
知的財産センター招聘教授、経済
同友会金融市場委員会委員も。今
秋、「松村謙三美術館」を清里に
オープン予定



《魔女の住む街》 2010年 10号
「魔女や魔法のお話が好きで、ずっと描きたかったフィレンツェの街並みに魔女を飛ばしてみた。『魔女の宅急便』をイメージしたんだと思います」

格段に良くなったね！ 特別賞を出して良かった！——松村謙三

力がくる。天才的なものを持った人が、いかに時の運に乗っていくか、ですよ。1000パーセントの努力を重ねたってダメなときはダメですからね。

暁子 米田さんは、松村社長の鶴の一声で受賞が決まりましたもんね。そういう人が審査員にいたということも、彼女にとつての運だから。

松村 いやいや、長谷川社長の並々ならぬ熱意があったから。私も非常にいい絵だなあと感じていたし、たつた一票差で何も賞がなくて終わるのは非常に惜しいなあと感じていたところ……長谷川社長と目が合いましたね。「頼む」という感じかな？ で、特別賞を出しました！

米田 ありがとうございます。

松村 あなたは才能と運、その両方を持つてるんだから。いくら能力があっても、運がなければね。それに、私はコレクターとして、片鱗の作品が欲しいんですよ。奥谷博先生や絹谷幸二先生の本

当に若いときの、画学生ときの作品も持ってますよ。今年の後半にはいいよ「KENZO 松村美術館」もオープンします。「これは！」という作家の作品を体系的に集めた美術館にしていきたいと思っています。

南蔵 松村社長の「最初期コレクション」が増えていきますね。(再びポートフォリオを見ながら)

この作品で、百科事典の上に乗ってるのはピサの斜塔ですね。これはどういうコンセプトだったんですか？

米田 特になにも考えてなかった……。

南蔵 どうしてこういう組み合わせでなければならなかったのか、その答えはきつと20年後、30年後に出てくる。当時は「この組み合わせが面白いなあ」くらいにしか思っていないはずだけど、必ずその答えが見えるときがきますよ。

南蔵 この絵の舞台はミケランジェロ公園から見たものですか？

米田 はい、階段を300段くらい上って見える景色です。上がっている途中で何度か気持ちが悪く感じそうになりながら(笑)。

徳七 1000段くらいだったらなんとか上る気にもなるけど……(笑)。

南蔵 普通の人は上らないですよ(笑)。《魔女の住む街》は何号ですか。

米田 10号です。

松村 あ、10号!? 小さいのか、これ！これは大きいほうがいいよ。

南蔵 そうですね。舞台がフィレンツェだからかもしれないけど、大きなサイズでもうちょっとパノラミックな感じに展開されてもおもしろいですね。

米田 確かに、窓をしっかりと描きたかったのに描きづらかったです。大きな作品を描くということとは、そうなんです、私の課題なんです。

はせがわ・とくち
日動画廊代表取締役社長。1939
年東京都生まれ。64年住友銀行
東京支店勤務を経て日動画廊入
社。98年コマンドール芸術文化勲
章をフランス政府より受章



独学で通してきたこういう才能を 育むのもまた画商の醍醐味——長谷川徳七

南蔵 松村謙三特別賞受賞作が50号で、あとは30号、10号ですもんね。今くらいの大きさだからこそ、メルヘン調の世界として作品が成立している、というところですかね。
大きな作品を描くことはまったく別物の経験でしょう。モチーフがどう整理されていくかという問題がまずある。そこはたぶんしんどい時間になるはずですが、もうひとつ乗り越えていってほしいところですね。
徳七 松村社長がちゃんとお買い上げくださるそうだから、安心して力作を描いて(笑)。メルヘンチックなものを100号でどう出せるかっていうのは……物語性をもっと高く掲げていくというのが今後の課題だなと思いますね。美術界は常に動いているし、大きな賞を受賞したから、一度の個展がうまくいったから、といって未来が保証されるわけじゃない。10年後じゃ遅い、忘れられて完全にアウト！(笑) 自分で考えて次の山を越えていかなきゃ、松村さんだって認めてくれないよ。

暁子 そろそろ次の個展を決めなくちゃね。まだ東京ではお披露目をしていないので、まずは大作という課題をクリアしましょう。初期の作品を買ってくださるコレクターなんてなかなかいらっしやらないものなんです。作品一点一点を好んで選ぶのとは意味が違って、画家の生き方をまる

ごとに残そうというヴィジョンに基づいてのコレクションシヨンのわけですから。出会いも運のうちだからあとはやっぱり残り10パーセントの修業を積みなからちやね。

米田 この夏は、ヨーロッパを1ヶ月くらいかけて旅行しようと思ってるんです。(画廊の)担当者の方からも、今の世界観が一定のレベルに達するまで姿勢を崩さずに頑張れと励ましていただいているので、風景の中にある人物、物語を感じさせるような作品を描けるように、技術が追いつけるように——フィレンツェにも行くので、もう一度300段上って取材して来ます！

松村 ぜひ、またいい絵を。やっぱり日動さんが応援してくれると全然違うでしょう。

米田 ありがたいです、はい！

松村 やっぱり賞を獲ってもね、画廊さんが応援してくれる賞じゃないとね。いろんな美術賞はあ

【まなざし】 2004年 20号
「インドに行った際に、大学の中のフラワーフェスティバルに参加。綺麗な花が沢山展示されている中で、切ない表情をした女の子に出会い、なんで悲しそうなのか気になってカメラのシャッターを切った。帰国後、彼女のその時の想いを想像しながら描きました」。かつて人物画に取り組んでいた頃の作品



描けることに喜びと感謝を込めて

——作品には、動物がいろいろな姿で登場して、強い印象を残します。ペンギンはその中でも特によく取り上げているようですね。

米田 ペンギンは鳥なのに空を飛べなくて、水中ではスーツと泳げるのに地上ではジタバタしていて、不器用なところがどこことなく人間くさくて描きたくなんですね。ヒトを動物に置き換えることで、見る人がクスッと笑える絵になっていると評されたことがあって、それにはすごく納得しました。(モデルを設

なったのは制作する上で大きなポイントですね。やりたいこともたくさんあるし、モチーフには困らないんですが……先ほどエロティシズムっていう話題もありましたけど、まだ人間的に追いつ



《森の向こう》 2011年 10号
「『森のくまさん』をテーマに、少女と熊を描きました。初めて緑を描いた作品。道の先には何か見たことのない世界が広がっている……というイメージで。ほのぼのしているようで、なにが恐怖のようなものを感じて欲しくて」

はせがわ・あきこ
日動画廊専務取締役。聖心女子大学で美術史を専攻後、ニューヨーククリスティーズ研修生、ニューヨークメトロポリタン美術館(20世紀部門)勤務、日動画廊本社営業部勤務を経て、現職。東京都生まれ



筆遣いに穢れがなく、清らか。この純度は非常に強みです

——南島宏

るけど、「ハイ、賞！」と賞金だけあげておしまいっていうのとは全然違うからねえ。

徳七 昭和会展で賞を獲った作家は、必ず一度は自宅を訪ねます。どういう生活環境で現状やっているのか、これからどうなっていくのかを考えるために見たいし。とことんサポートしようと思えば、やっぱりそこまで見ないとどんな手助けが必要なのかわからないですからね。担当者はそれぞれの作家についてるんですけど、やっぱり僕が行って直に感ずるといってはとっても大切なことだと思っています。



みなみしま・ひろし
美術評論家。第53回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッションナー、国際美術評論家連盟理事、全国美術館会議理事等を歴任。現在、女子美術大学教授。1957年長野県生まれ

定して)変な誤解を与えることもありませぬ。誰かを傷つけるようなものは描きたくない。以前は、旅先のインドで出会った女の子だとか人物画も描いていたんですが、その人からじみ出るものやせつない感じを描きたいと思っても、自分の世界観と結びつけるまでには至らなくて。大きな作品と同様、人物画も課題のひとつです。

南島 米田さんのこれまでの流れは、ずっとメルヘンチックな世界ですよ。ノーマン・ロックウェルの道をとる、という方向もあるけれど、ともすれば作品を消費されるようなおそれもある。隠しているものがじわじわと出てくるような絵を見たいと僕は思います。量産するタイプの画家だとは思えないし、じっくり描いていくんだと思うんですけど。取材はいつも現場で？

米田 スケッチブックとカメラを持って動物園に行ったり、取材旅行もよくします。下絵に時間がかかるんですが、構想をまとめてキャンバスに向かって描き始めたら速いですね。下絵を考えると、ある程度の形になるまでパソコンの中で作業してしまいます。(画像操作のコンピュータソフトである)フォトリショップを使えるように

けないところがあるので脱皮していかないと、と思っています。

暁子 彼女は美術大学という道を通っていないし、今も無所属なので、この業界の実情もこれからのいろいろと学んでいくことになりませぬ。最近はずループ展に自作を出品していても見に来ない作家も結構いたりするんですが、彼女には素直な真面目さがある。自分の作品が並んでいなくても、いい展覧会だと思えば足を運んでようだし、今後いろいろと吸収していけるでしょうね。

南島 米田さんには松村謙三特別賞を受賞したという意味をじっくり考えていってほしいという気がします。作品から察するに、米田さんは自分自身が絵を描ける環境にあることをすごく喜んでいて。有難いと思いつながら描いている人の絵なんですね。そうした謙虚さと同時に、どこかおびえているところがある絵だから、「私は描ける人間だ」というような驕りが感じられない。この感覚はものすごく貴重だと思うんです。

松村 そうね、君には感謝の気持ちがあるよね。**米田** 自分なんてまだまだ、という気持ちがあるんです……。

松村 いや自虐的っていうんじゃないかって、非常に珍しい、社会から失われかけている感謝の気持ちをあなたが持っているってことです。そういうのは絵の中に表れているんじゃないかな。南

島先生がおっしゃったみたいに、絵を描けることを感謝しているっていうことが、作品から伝わってくるよね。

ぜひここで「松村謙三特別賞をもらって人生変わりました！」って言うってくれないかな？(笑)それを読んでね、ほかの作家たちも「そうか松村謙三賞を獲ると人生変わるんだ！」って思ってくれるよう……。

米田 いや、本当に人生変わりました……ホントですよ、ホントです！

徳七 米田さんは、来年は個展をやらなくちゃいけない。そこでまた人生を変えるくらいいのものを発表してほしいですね。

でももちろん、作品が悪かったらやらないからね！洋画の未来を担う作家になるかどうか、業界が見てるんだからね、業界が唸るか、お客さんが唸るか、そこが大事なところ。若いから可能性はたくさんある。そこで何をどう進歩させたのか見せていかなきゃ。よければ個展をやるし、ダメならシビアにさよならなんだから！

南島 この二人を唸らせたらいいんですよ(笑)。ただ、描くこととそれを展覧会で人に見せるということはまったく別のことですから、これからは作品を見せるという覚悟をさらに意識してほしいですね。

——最後に喝が入ったようで(笑)。でも制作に向けて、良いモチベーションになりましたね、楽しみですよ！

彼女にはとても素直な面白さがある。今後もしいろいろ吸収していったら——長谷川暁子